

フェンシング競技の紹介とその歴史・関学フェンシング部の歴史と現況

フェンシング部 竹安 清（昭和 39 年卒）

1. フェンシング競技の歴史

フェンシングは中世ヨーロッパで発祥した剣を用いて突いたり、斬ったりする武術で元々は戦闘術として発展したものが次第にスポーツ競技化した。

第 1 回近代オリンピック(1896 年アテネ大会)からの正式種目としても知られています。

FENCING という言葉は「FENCE (垣根、防ぐ)」からきていて、自分の身を守る、ルールを守る、という意味を含んでいる。

フェンシングの魅力は騎士道からくる礼儀正しさ、華麗なプレイ、頭脳的な駆け引き、スピーディーな試合運び、科学的なテクニック等であります。

2. 日本のフェンシング競技の歴史

日本では明治初年、陸軍戸山学校でフランス人教官により片手軍刀術として伝えられました。スポーツとしてのフェンシングは昭和 7 年（1932 年）岩倉具清がフランス留学から帰国し、慶應義塾大学、法政大学などの学生に教えることから始まりました。オリンピックには 1952 年、ヘルシンキ大会に視察員を派遣、初の選手団派遣は 1960 年のローマ大会でした。オリンピックの成績は 1964 年の東京大会で男子フルーレ団体 4 位入賞が最高で「オリンピックでメダル獲得を」が日本のフェンシング界の悲願となっていました。

その後協会挙げての強化が実り 2008 年北京オリンピック男子フルーレ個人戦で太田雄貴選手が銀メダルを獲得、2012 年ロンドン大会でフルーレ団体銀を獲得した。太田選手の活躍で日本でもフェンシングがメディアでの露出も高まり小学校からクラブで始める子供も増えたが、やっと競技者人口 6 千人弱で太田選手の提唱で 3 万人人口拡大を提唱しているが親しむにはルールが難解装備品が高額、練習場がない、指導者が不足などなかなかマイナー競技の域を抜けませんが、大会試合会場のショーアップやビデオ判定の導入など見て楽しい、面白い競技への脱皮へ懸命です。太田雄貴選手の活躍は競技以外でも 2020 年東京オリンピック招致委員会の現役アスリート代表で堂々と英語で招致スピーチを成功させ、世界的にも日本のフェンシングの存在価値、フェンシング選手の文武両道の活躍を日本国民にも知ってもらいフェンシングに携わる者として大変うれしい。因みに現、9 代国際オリンピック委員会会長 トーマスバッハ氏は元ドイツのフェンシングの金メダリストです。

3. 競技方法

3 種類の剣によって競技が構成されます。

— 剣の種類 — ①フルーレ ②サーブル ③エペ で競技ルールが異なります。

① フルーレは 3 種目のうち一番基本の種目で有効面は胴体部分で金属糸のメタルジャケットを着ます。「攻撃権」を尊重する種目で、攻撃—防御—反撃—再反撃といっ

た瞬時の剣のやり取りがこの種目の見所です。

- ② サブルは馬上で行う軍刀術がスポーツ化したもので、有効面は腰から上で（頭、両腕含む）、サブルの面白みは豪快な斬りあいであり、フルーレと同じように攻撃権のやり取りがあります。
- ③ エペは決闘武術として行われたものが競技化したものです。有効面は全身どこでも有効で、攻撃権は関係なく先にランプがつけば勝ちですが、同時にランプがつく相打ち得点もあります。ルールもシンプルで装備も少ないので初心者も取り組みやすい競技です。

フルーレ剣には 500g の、エペ剣には 750g の加重で起動するバネが剣先に装置されています。フェンシングが科学的要素があるゆえんです。

—競技 会場— 試合場 専門用語でピストと呼びます。

大きな大会（オリンピック、世界大会、全日本決勝戦）ではピストを床から数十センチ高くステージ化し、会場を暗くピストに照明をあてショーアップします（YouTube 放映に有効な演出です）。

ピストは 長さ：14 メートル 幅 1.5～2 メートル のコートです。

—勝負、判定の方法—

電気審判機を用いてレフリーがジャッジします。

大きな大会ではビデオ判定ルールもあります。

学生の大会では装置費用がかさむ為導入できませんが早い機会に簡易な装置の開発が望まれる。

—試合時間—団体戦—個人戦—

個人戦は、通常実働 3 分間 1 セットの 5 本勝負、決勝トーナメントでは実働 3 分間 3 セット（セット間の休憩は 1 分）の 15 本勝負で行われます。

団体戦は 3 人对 3 人の総当たり 9 試合を、実働 3 分間で 1 試合目は 5 点まで、2 試合目は 10 点までといったように得点をチームで積み上げていき、45 点先取した方を勝ちとするイタリアンリレー方式で行います。

- ・直近ではオリンピック大会、世界大会、全日本大会決勝戦ではビデオ判定も導入され個人戦 15 本勝負で 3 回までビデオ判定を選手は主審に要求できるルールができました。学連大会では未だ導入されません。

—フェンシングの動作用語と審判員のジェスチャーと用語—

フェンシングの用語はフランス語を使用します。フェンシングがなんだか縁遠い存在感を放つのは、専門用語がどれもフランス語の聞きなれない言葉だからかもしれません。

—科学技術の発達とイノベーションで競技は進化した—

- ・ヨーロッパの中世時代火薬、銃砲の発達で武器としての剣が剣術になり騎士道の剣術としてフェンシングの原型であった。
- ・マスクの発明、開発で競技化が進んだ。アナログ判定時代。1960年位まで主審と副審4名の目検、音、剣のしなりで判定。
- ・1960年代以降、電気審判機の発明開発、金属繊維の開発でFとEは国際大会では必須。Fは500g、Eは750gの剣先バネ装備。1 / 25秒タイム差セット。
- ・2000年代デジタル技術の発達で審判機はデジタル表示になる。
- ・ロンドンオリンピックではコードレス（リールなし）の電波判定装置開発。
- ・近年、判定においてビデオ判定が採用に至る。15本勝負の3回迄認める（コードレスやビデオ判定装置は大学、学連試合には高コストのため適応せず）。

私見ですが、近い将来人工知能搭載の審判機が開発されれば複雑な攻撃権の判定が瞬時に可能で、レフリー不要、ビデオ不要になるでしょう。この様に科学技術の発達とともにフェンシング競技はスピーディーに、デジタル感覚で華やかに楽しめるようになりました。日本の武士道精神を重んじ剣道の伝統を守り続ける姿と対比的な競技です。

4. 関学フェンシング部の歴史 概略と現況

- ・1941年（S16年）三島清春OB（S19法文卒）により創部。
その後第二次世界大戦にて休部。
- ・1947年：戦後再開
雲財OB（S25経卒）たちによって再開、この時期GHQにより剣道の活動が一時期休止され、剣道からの転向者もあった。
- ・1954年～1960年：「よく練習する関学時代を築く」
三宅OB（S33経卒）たちの時代、猛練習する関学として基礎を築く。
三宅OBは卒後、母校岡山県西大寺高校にフェンシング部を創設、現岡山県フェンシング協会会長。
- ・1960年～1968年：個人と団体に全国制覇成し遂げる。
森OB（S35文卒）京都平安高校でのフェンシング経験活かしコーチ、監督就任。
石角（S38商卒）インカレエペ個人優勝、竹安主将（S39社卒）大学王座戦サーブル団体優勝、その後2年連続王座戦出場、「強い関学」時代築く。
- ・1969年～1977年：男子エペの躍進、女子チームの誕生。
1972年 旧姓 野村、山村、井面が関西女子フルーレ団体初出場。
1973年関西リーグ男子エペ団体初優勝、王座戦日大に敗戦。
- ・1978年～1988年：「男子2部リーグ時代」「女子の活躍時代」
1978年男子2部陥落。以降、佐藤、石野時代。尾形現監督時代、2部優勝するも入替え戦に敗れ昇格果たせず。
女子は、片岡、杉浦、片浦、野田、坂林、米田などの活躍で関西リーグF3位インカ

レ出場と女子の第1次黄金期を築いた。

- 1989年～1996年：「平成の初めの時代の低迷期」
1993年男子は3部リーグに陥落。女子も低迷、創部来初の深刻な低迷期を経験する。
サーブルの電気審判化の対応遅れる。OB会の対応遅れも反省。
現役部とOB会は車の両輪で共通目標に立ち向かうべき教訓を残す。
- 1997年～2004年：「4年ぶりの男子2部復帰、女子も12年ぶり」
清風高校経験者原田前監督、三枝 星稜高校経験者の活躍で関大破り4年ぶり2部
復帰。女子も1998年12年ぶり女子リーグ復帰。2003年女子2部優勝も入替え負け。
2004年男女とも部員不足に陥り、創部来初の廃部危機に陥る。
- 2005年～2010年：「部活の存続が危ぶまれた時代」
2001年～2004年新入部員が集まらず、2005年以降男子団体棄権、女子他部からの
レンタルや神戸、大阪の国公立大と合同合宿行う。この状況下でも女子大崎（H19
経卒）がエペで関西個人優勝、インカレベスト8入り、ナショナルチームに選抜され
ヨーロッパを転戦。関学でJAPAN選手の第1号となる。
2009年2名、2010年3名の合格を得、部員不足の廃部の危機を回避した。
- 2010年創部70周年総会 「強い関学フェンシング復活」宣言！！
強い関学フェンシング復活のため人・物・金の支援をOB会組織を強化して実行する
ことをOB会が全会一致で採択。先ず強化支援募金を募る。
結果、森OBの電気審判機2台の贈呈、募金、OB会費の増額積み立て等で、かつて
は出来なかった高校大会のスカウト、リクルート、外部招聘コーチ、学生の関東大学
への遠征費用支援、海外遠征者支援など、男女1部リーグでの上位目標をチャレンジ
するにふさわしい環境が整った。復活へのステップは以下の通りです。
2007年部員4名 女子2名で団体戦う
2008年 8名 男子3部、女子2部 低迷
2009年 9名 男子3部、女子2部 インカレ出場者なし
2010年 11名 女子2部優勝も入替え戦負ける 「強い関学」復活宣言
2011年 15名 男子2部、女子1部へ昇格 強化3ヶ年計画策定
2012年 22名 外部招聘コーチ2名導入 インカレ11名出場
2013年 25名 男子2部2位昇格逃す 部活マネジメントマニュアル導入
2014年 30名 男子2部2位 エペの不振 JAPAN4名
2015年 31名 37年ぶり男子1部昇格 女子エペ団体全日4年連続出場
2016年 36名 男子1部4位 女子1部3位 エペは男女W優勝（創部初）
王座戦 男女共3位 JAPAN選手8名 慶應義塾大学と定期戦
締結
女子 渡辺優香（教育）シニアE全日本ランク11位、川島瑞月
（人科）S13位で卒業
- 2016年OB総会「2020年までに関西リーグ総合優勝」宣言！！

5. 関学フェンシング部の今後の課題

関西4私大（関関同立）の中でリーグ総合優勝の無いのは関学だけです。

創部来成し遂げていない総合優勝を達成する部活に成長、維持する為に下記の課題を現役フェンシング部とOB会は車の両輪となって前進する必要がある。

1. 小、中、高、大一貫校、提携校（啓明学院、帝塚山学院、千里国際校）のインフラを活かしたオール関学フェンシングの取り組みでフェンシング競技人口のすそ野を広げるか。
2. 大学部活卒業者がフェンシング活動を継続し指導者として育つ環境作りが必要です。
3. 2015年に兵庫県フェンシング協会に登録、設立した「関学クラブ」（仮称）を上記1、2のためにもOB会は育成させねばならない。
4. 外部の経験、実績豊富な招聘コーチの導入可能にする財政力の確保。
5. 「文武両道」が叶う優秀高校生のリクルート活動をタイムラインに沿って活動サイクルを確実に回すことの定着化。
6. いかに素質のある選手を高度な練習環境や試合出場に出場させ、代表選手として海外試合の経験を積ませるかOB会の支援力必要。

6. 講座受講生への提言

部活動の成功は企業のインターンシップ制度に通ず。

チームが目標（優勝、勝利）を制覇するために真剣に計画を立て練習に励み、成果を点検しながら目標に向かってやり遂げる部活動は事業活動に於ける生産、品質、販売管理などの管理業務を円滑に進める手法のPDCAサイクルのマネジメントと同質である。

	事業活動	部活動
P	予算、業界ランク	優勝 ランク
D	達成計画 5W1H プレゼン・稟議	強化合宿・強化連 学内、OB会プレゼン
C	決算 予・実差 株主総会	勝敗分析・戦力比較 監督会議、OB総会
A	改善 再実行	リクルート・新チーム作り

最後に4C（Chance, Change, Challenge, Competition）忘れず！

日本の人口の減少化、マーケットの縮小、多様化の時代、これからの新社会人には多くのチャンスが与えられる、この時代の変化を察知し激しい競争に粘り強くチャレンジする体力、知力、変化対応力はマスターリーフオーサービス、ノーブルスタボネスの精神を学んだ皆さんは必ずや周りの期待を実現できる人材になることを確信します。

ご清聴ありがとうございました。



(写真提供『関学スポーツ』)



(写真提供『関学スポーツ』)